

高尾山報

令和7年 7 月号

闇夜に灯る祈りの光と共に信仰の道を歩む
於・信徒峰中修行会



吉田大僧正と親しくお話しされる

真言宗智山派新管長 吉田大僧正御来山

四月二十一日(月)

真言宗智山派 埼玉第九教区 有勝寺住職 吉田大僧正が、真言宗智山派管長・総本山智積院第七十三世化主へ御就任が決まり、このたびご挨拶のため来山されました。

吉田大僧正は当山役員・僧侶に迎えられ、大玄閣より書院に進まれました。書院においては、当山貫首と親しくご挨拶を交わされ、和やかなひとときを過ごされ、皆に見送られながら、下山されました。

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(157)

暑中見舞いが届く時節となりました。とりわけ「夏の土用」と呼ばれる立秋前の十八日間は夏本番(今年は七月十九日から八月六日)。涼しげな朝顔やスイレン、風鈴や水辺などが描かれた暑中見舞いの絵はがきは、相手の健康を気遣う、思いやりの心が詰まった一服の清涼剤でもあるでしょう。

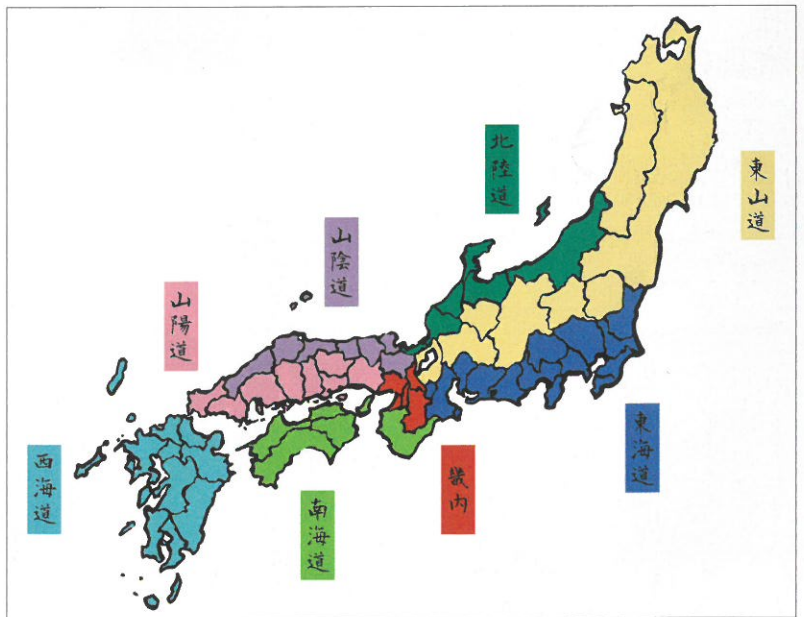
「暑中」は「暑中」(暑さ中)とも読みます。この時期は、気温の上昇とともに身体に不調が出やすいものです。夏負け(夏バテ)を防ぐためにも、昔から「土用の丑の日」には「う」の付く物を食べる」という丑の日の「う」にちなんだ風習があります。鰻にうどん、梅干しに瓜(キュウリ、スイカなど)など、栄養

価の高く消化の良いものを食して英気を養いたいものです。一方で「土用の入りに秋風が吹く」という言い回しもあります。暑い盛夏の中にあって、どこかに秋の風が吹いているのでしょうか。暦の上では「晩夏」(夏の終わりを迎えています。どこかに小さな秋の前触れが隠れているかもしれません。厳しい夏の峠を乗り越えるためには、心の休息も必要となるでしょう。我が心

この「我が心」の歌は、中国の詩人、白樂天(七二二〜八四六)の漢詩『白氏文集』の二節「但能心静かなれば即ち身も涼し」(ただ心を静かに澄ませているので、そのまますも涼しいのだ)という句を踏まえたものです。歌にある「静けし」は、穏やかに落ち着いた状態を意味します。「心頭滅却すれば火もまた涼し」という諺のように、無風の酷暑にあっても「心静けき時」には涼風が感じられるのでしょうか。なかなかこのような境地には至りませんが、せめてざわつく心の波風を抑えて、少しでも安らぐ時間を増やせていけたらと思います。

さて本連載では、これまで三十四回、約三年近くにわたって、全国に残されている弘法大師空海(七七四〜八三五)伝説を取り上げてきました。北は東北・北海道から南は九州・沖縄、果ては海を渡って中国大陸の彼方まで三十四回、約三年近くにわたって、全国に残されている弘法大師空海(七七四〜八三五)伝説を取り上げてきました。

お大師さまが生涯にわたって追求められた真言密教の教えが、遍く場所に行き渡っていることを物語るものです。こうした背景には、全国に「道」(街道)が作られていったことも無縁ではないでしょう。例えば、日本全国を表す言葉に「五畿七道」という呼び名があります。「五畿」は、京都周辺にあつた山城・大和・河内・和泉・摂津の五か国、「七道」は、東海・道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道を意味し、それらの国をつなぐ「道」が通され



古代の行政区画を示す五畿七道の図

ていきました(明治時代に北海道が加わって「五畿八道」となりました)。江戸時代には江戸を基点とした「五街道」(東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道)も整備されます。時代とともにますます人々の往来が活発になり、さまざまな地域の文物が出会うことによつて、新たな文化が生まれていきました。

お大師さまの足跡も、高野山の霊験を諸国に説き歩いた「高野聖」と呼ばれる僧侶や、お大師さまを慕う多くの人々によつて各地に伝えられていきました。そしてそれぞれの土地で混じり合うことによつて、新しい伝承が生み出されていったのです。「道」は陸地だけのものではなく、世の中を何にたとへむ

「道」は陸地だけのものではなく、世の中を何にたとへむ。道とはかねて昨日今日とは思はざりしを(『古今集』在原業平) (人生の最後に行く道だとは以前から聞いていた

修行を通して大自然の中で自らを見つめ直す

第百二十四回 信徒峰中修行会

六月七日(土)～八日(日)



琵琶滝で滝行を修す

初夏の爽やかな陽射しのもと、「第百二十四回 高尾山信徒峰中修行会」が開催されました。山麓の不動院を出立した先達と修行者、総勢約四十名の一行は、まず琵琶滝にて滝行を修しました。その後甲州街道を進み、高尾梅郷を経由して蛇滝へ練行を行いました。さらに険しい山道を十二丁目茶屋前まで登り、浄心門を左に分岐して三号路を通り、高尾山を中興された俊源大徳が飯縄大権現様を感得されたと伝えられる霊地・炊谷にて、厳かに法楽をお勤め致しました。翌日未明、宿坊を出発して暗闇の山中を練行して登頂し、早朝の御護摩修行に参列されました。朝食後には、東京多摩教区・大幡山寶生寺住職の五頭秀山師による、「縁々今を生きる」と題された法話を聴講されました。その後有喜苑において、佐藤貫首大祇師のもと柴燈大護摩供が厳修され、修行者の皆様も共に祈りを捧げられ、下山して無魔成満となりました。



暗闇の中神変堂にて法楽をお勤めする



険しい山道に行く修行者一行



五頭秀山先生による法話



有喜苑における柴燈大護摩供

第五十回 高尾山慶賛会 通常総会開催

六月十七日、第五十回高尾山慶賛会通常総会が八王子エルシーにて開催され、約八十名の方々に御出席頂きました。

総会は慶賛会副会長である榎崎博氏の挨拶により開会し、様々な議事が進められました。続いて高尾山協賛各団体に高尾山及び高尾山慶賛会より賛助金が贈呈され、佐藤貫首より謝辞が述べられ閉会致しました。

総会後には真言宗智山派布教師、多摩少年院教誨師会・顧問を務められる伊佐榮豊僧正による、『慶賛会五十年の歩み』と題された記念講演が行われました。



謝辞を述べる佐藤貫首



伊佐榮豊僧正による講演「慶賛会五十年の歩み」

慶賛会 入会のすすめ

もともと仏教語で「慶賛」とは、仏教寺院、堂塔などの新築、修繕を祝賀する意味であります。が、高尾山慶賛会は、高尾山古来から伝承された年中行事を賛助し、御本尊・飯縄大権現様を尊信し、地域社会の親睦を図ることを目的としております。

近年では高尾山は「霊気満山 高尾山」人々の祈りが紡ぐ桑都物語」というテーマで日本遺産に選ばれており、多くの参拝者が来られています。

ぜひとも茲に広く高尾山慶賛会員を募り、ご加入ご協賛を頂き、ご本尊様の威神力に浴されますよう祈念するものであります。

年会費 一口五千元

詳細は高尾山慶賛会事務局にご連絡下さい。
〇四二一六六一二二五



侍装束を着た慶賛会の皆様

観音菩薩の宗教 ⑨1

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

如意輪観音（その29）

観音菩薩の連載にも拘らず、前回はキリスト教における男女観、特に女性の捉え方を見た。その理由は『聖書』やそれに基づくローマ教皇の女性への姿勢が、以下に述べる仏教とは大きく異なる点を明らかにするためであった。古層の仏典を見ると、ブッダは女性を恭しく迎え、そうした女性

は男性と変わりなく悟りを開いたことが認められる。ブッダ入滅後、部派仏教の時代に古き男性優位の思想や制度が仏教界を覆ったものの、大乘仏教では再びブッダの思想に回帰した。大乘仏教の女性観は遥か日本でさらに開花し、紫式部や清少納言のごとき日本の貴族女性が自立的に石山寺に籠り如意輪菩薩に祈願するまでに至った（『観音菩薩の宗教⑧』）。日本では欧米のキリスト教文化圏とは異なり、女性に対する宗教的な抑圧が稀薄だったため、現代にいたるまで女性による女性のための解放運動が自発的に起きなかった。明治・大正期の女性解放運動家の平塚らいてうにしても、昭和時代の中ピ連（中絶禁止法に反対しピル解禁を要求する女性解放連合）にしても、令和のLGBTQ+の運動にしても、欧米のウーマン・リブやフェミニズムやジェンダー平等運動の影響を受けて始まったもので、日本発祥ではない。終戦直後のアメリカ人の日本文化に対する誤

解や偏見もあり、日本女性性は抑圧されているとの通念があったが、そもそも日本では紫式部の時代のみならず、近世でも維新後でも女性性は相応の力を有しており、解放運動を起こす必然性がなかった（『観音菩薩の宗教⑧』）。筆者懇意の江戸文学者・鶴橋俊宏氏（静岡県立大学名誉教授）に如上のことや落語に見る男女の話をしたところ、江戸の庶民文学においても家庭では明らかに女性優位の記述ばかりが見られるとして、式亭三馬の『四十

を生んだといえよう。日本女性の自立性は仏教のみによって形成されたとはいえず、蓋し仏教はその有力な思想的背景であった。カトリックが現代（二〇二五年七月現在）にいたるまで女性聖職者を認めていないのとは異なり、仏教ではその開祖であるブッダの時代から尼僧への門戸が開かれていた。それを明らかにするため、まずはブッダ時代の仏教にまでさかのぼり、仏教の女性観を見てみたい。

ブッダが悟りを開き、鹿野苑（Mṛgaśāla）に赴いた時、以前の修行仲間五人に出会って彼らに最初の説法をした。これを初転法輪といい、五人は



ブッダと出家を願い出るマハーパジャヤーパティー（向かって左下の女性）。ガンダーラ出土の浮彫。2世紀。San Diego Museum of Art蔵（そこではナンダとブッダと解釈されるが、筆者は誤りと考える）。

最初の仏弟子となった。このように当初はブッダの教団は男性のみによって形成されていたが、ブッダの継母とされるマハーパジャヤーパティー・ゴータミー（Mahāpajāpatī Gotamī、摩訶波闍波提）が最初の比丘尼となつて以来、多くの女性が出家した。比丘尼（Bhikkhunī）とは、男性出家者を意味する比丘（Bhikkhu）の女性形であり、漢字は原語の音写である。音写に使われた「尼」は後にそのまま尼僧を表すようになった。マハーパジャヤーパ

ティー・ゴータミーの出家にいたる経緯とブッダとのやり取りは律蔵の小品の第26章などに記されている。

それらによれば五百人の女性とともに出家を求めてきたマハーパジャヤーパティーに対し、ブッダは次のように言つてこれを認めた。

「ブッダが申します、良き比丘尼（bhikkhuniyo）であればみな、およそこの教団（Saṅgha）の一員として認められるべきを」（The Book of the Discipline, Vol. V (Cullavagga) Khandhaka 3, Chapter 26, pp.352-393, Pali Text Society）

ブッダはマハーパジャヤーパティーが来た時、再三その出家を断り、女性出家者が守るべき『八敬法（Aṭṭha garudhamma）』を遵守することを条件に出家を許可したと伝えられる。『八敬法』は比丘の比丘尼に対する優位を規定した戒律で、これより見れば仏教もまた「男尊女卑」と批判されても

やむを得まい。しかし、近年の研究によれば、『八敬法』は部派仏教時代にインド保守派のイデオロギーから付加されたもので、ブッダ自身の思想を反映したものではないとされる。これについては

次号に述べる予定である。ブッダ時代の尼僧の詩を集成した『テリーリガーター（Therīgāthā）』一五七〜一六二詩節には、マハーパジャヤーパティーが出家した後、完全な悟りを得たことが述べられている（中村元訳『尼僧の告白―テリーリガーター』岩波文庫、一九八二年、三七〜六二頁）。このことは、女性であってもブッダと変わらない境地に達せられることを示している。

また同書三三七偈には、ブッダがスンダリーニ（Sundarī）を迎え、面会した時の言葉がある。スンダリーは、後世の注釈によると上述したブッダの継母マハーパジャヤーパティーの娘であ

り、ブッダの義妹とされる。美貌で知られ、強い自負や執着もあったが、ブッダに若さの無常を知らされて出家したという。彼女を迎えた時、ブッダは以下のように鄭重に、かつ喜びに満ちた言葉で恭しく迎えた。

「ブッダいわく、」「良き女人よ。そなたは、よくこそ、来られました。それで、あなたは歓迎されないはずはありません（後略）」（前掲書、七〇頁）

この文章を原文のパーリ語にさかのぼつて一語ずつ語釈してみよう。原文は以下のとおりである。"Tassā te svāgaṃ, bhadda, tato te adurāgaṃ" (Therīgāthā, PTS Edition, Chapter 13, "Book of the Twenties", stanza 4, v.338, p.80. api.leanbuddhism.org/files/internal/Bhikhu-Mahinda-Therīgāthā-Edition-2.pdf.)

Tassā は指示代名詞の女性形・属格で「彼女の」が直訳であるが、この文

はブッダが話しかけているものである。文法的には緩和的に用いられたと解釈し、ここでは「ブッダにとつて」とする。この語は中村訳では訳されていない。上記のPDF版における Bhikkhu Mahinda の英訳では "Then「それでは」と接続詞のように訳されている。te は二人称代名詞の与格で「あなたにとつて」であるが、ここでは自然な日本語にして「あなたは」と訳する。

svāgaṃ は sva-「自ら」と āgaṃ「来た」よりなり、「自ら来たこと」「適切に来たこと」「正しく来たこと」の意となつて、来訪者に対する肯定・歓迎のニュアンスを表すようになった。英語では welcome と訳せる。bhadda は bhadda「良き女性」「幸いな女性」の呼称で、来訪した女性に対して丁寧な呼びかけである。英語では lady となる。adurāgaṃ は、否定接頭辞 a-

「な」+ durāgaṃ「遠くから来た」からなり、「遠くから来たのではない」「招かれていない者ではない」と来訪者への歓迎の言葉を意味する。これらを理解したうえで和訳すれば、中村訳に見えるようにブッダが来訪したスンダリーニを鄭重にして喜んで迎えたことがわかる。

これらのことについて中村元は言う。「尼僧の教団の出現ということは、世界の思想史においても驚くべき事実である。当時のヨーロッパ、北アメリカ、西アジア、東アジアを通じて、へ尼僧の教団なるものは存在しなかった。仏教が初めてつくつたのである」。さらにギリシヤ人のメガステネスの言葉を引いて「インドには驚くべきことがある。そこには女性の哲学者（philosophoi）がいて、男性の哲学者に伍して、難解なことを堂々と論議している」と述べた（前掲書、二二〇頁）。

八王子造園業組合青年部 創立50周年記念事業

富士桜植樹・書院庭園整備

五月二十五日(日)



八王子造園業組合の皆様



植樹された富士桜



庭園整備の様子



立派に整備された庭園

このたび、八王子造園業組合青年部が創立五十周年を迎えられたことを記念し、当山に富士桜を一本ご寄進いただき、百八階段を登り切った場所に植樹して頂きました。今後は新たな季節の彩りとして、参詣者の心を和ませてくれることと存じます。

またこれに併せて、普段はなかなかご覧いただく機会の少ない書院の庭園につきましても、丁寧な手入れを施していただきました。整備を終えた庭園の前に、八王子造園業組合の鈴木優様より、次のようにお話を頂きました。

「仏教の教えにも通じることかもしれませんが、庭を前にして心静かに座しますと、時とともに、また自身の心の状態によつてその姿が少しずつ異なつて見えることがございます。そのように移ろいゆく美しさも、庭の大きな魅力のひとつではないでしょうか。私達がこうして薬王院で貴重な経験をさせていただく機会を頂き、心に残るひとときとなりましたことを、感謝申し上げます。この素晴らしい書院と庭園が、今後も末永く守り伝えられていくことを、組合員一同でお祈り申し上げます。」

高尾山環境保全基金協力会

御堂案内板除幕式

五月二十九日(木)



大本堂前案内板



除幕式に際してお祓いが行われた



環境保全基金協力会の皆様

このたび、高尾山境内に点在する十一か所の御堂を時代に応じた形として視覚的に御案内する、ピクトグラムの案内板が新たに設置されました。

この看板は、ライオンズクラブ有志で構成される高尾山環境保全基金協力会（石井征二会長）の皆様よりご寄付を賜り設置されたもので、大本堂の案内板前にて佐藤貫首御導師による安全祈願と除幕式が執り行われました。

案内看板には、海外からのお客様にも伝わりやすくなるため、日本語・英語・韓国語の三か国語が表記されており、QRコードを読み取ることで、各建物の詳細な解説を多言語でご覧頂けるようになっております。

なお、ピクトグラムのデザインは、昨年三月に御護摩受付所前に設置された案内看板と同様、日本工学院八王子専門学校デザイン科の学生によるものです。各御堂の特徴がデザインに表れており、大本堂のデザインは御本尊様の持物である剣と縄索が描かれております。

厄年を過ぎた

御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら

一年・一年を

七十才を過ぎたなら

暑さ、寒さを

八十才を過ぎたなら

春夏秋冬を

九十才を過ぎたなら

一日・一日を

気を付けられ

日々を大切に

圓滿にお暮し下さい

当山では皆様の

（身体健全
寿命長久）を祈念して

福壽圓滿の

御護摩を

お申し受け致しております。

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

67

二十世岳純2 二つの紀行文2



高尾山の俯瞰図 『高尾山石老山記』
(国立公文書館デジタルアーカイブ)から

引き続き『高尾山石老山記』(文政二〇年・一八二七)は、『多波の土産』(同二年)という二冊の紀行文から、当時の旅行者の一手一投足や山内の光景を見てみよう。

表参道の道行き

『多波の土産』の作者は、金比羅社の堂守をしている浄土院の寺僧から、山奥に生息する狼が昼日中に浄土院辺りまで降りてきて飼犬が被害にあったという話を聞かされている。すでに、「日も夕附頃なれば」と先を急ぐが、文政二年八月一六日は新暦では秋分を過ぎた九月二四日。この後、夕七つ(午後三時から五時頃)に薬王院に着いているが、「夕」という形容からすると、曇り空もかなり暗くなっていたのだろう。やがて、「黒き門」があり、浄土院の境内に入る。『新編武蔵風土記稿』(二八二二「多磨郡之部」成立)の挿絵には、浄土院の手前に黒い柵が

描かれている。

一方、『高尾山石老山記』の作者竹村立義は、一号路の道行きについて「道険ならず平らなる所あり、あるいは少し下る所もあり」と表現している。浄土院のあった城見台からリフト山上駅にかけてはそれなりの勾配であるが、旅慣れた竹村なりの感覚だろうか。やがて「大杉と言えに至り、杉の大木あい並びて森になり、その数二十本と言えり」という表現は、現在の大杉並木の事を述べていると思われる。それ以前の地誌類に収録された挿絵には、谷間に大杉の叢生する様子はあっても、参道の並木としては描かれていないが、「森」という表現からすると、竹村は実際大杉の根元を通過したのだろう。同書の挿絵も谷側の道端に大杉を描いておらず、道筋をはっきり示すため地誌類も省略して描いたのかもしれない。

「大杉を過ぎ黒門に出、

大なる冠木門あり、これすなわち黒門なり」。この黒門とは現在の四天王門の位置にあった門のことと、冠木門とは二本の門柱に横木を渡した簡素な作りの門である。柱の頭の木口に水が浸みて腐食するのを防ぐため銅板などを被せている。『多波の土産』には冠木門に至る途中、大杉の風景描写はなく、「又いそぎ行」とあるように、脇目もふらぬという状態だったか。

伽藍の参拝

黒門をくぐった先について、『多波の土産』の作者は「草地にして至って広く」と記す。足袋屋清八建立の唐銅五重塔と接待湯呑所、崖際に塔頭の蓮華院があるくらいで、広々とした印象だったようだ。現在の広庭は崖崩れのため当時より狭くなったと言われている。二人の作者とも仁王門下の石段を登り、薬師・大日・護摩の三つの仏堂の前に出るが、竹村は諸堂

とともに、文人らしく仁王門に掲げられた「高尾山」と記した扁額の筆勢に注目している。

さらに石段を登って飯縄権現社を参拝、竹村は「大社にして、もつとも壮麗なり」と記す。当時、奥之院への登り口は飯縄権現社に向かって左手の斜面にあったが、竹村の来訪時は「垣を結び錠を閉めたり。これを奥の院と言ひ、常に上る事を許さず」という状態だった。翌年に『多波の土産』の作者は奥之院を参拝しているの、その時は何らかの支障があったと通行止めとなっていたようだ。『多波の土産』の作者は奥之院の様子を「いと恐ろしき深山の景あり」と記している。当時はその場所が絶頂だが、景観を愛でるでもないので、樹木が繁茂した暗がりであったのかもしれない。大勢の人が山頂方面へ行列をなす現在とはかなり様子が違っていた。すでに江戸中期には、

女性の高尾山参詣が確認できるが、竹村は「ことに女人を制せざれば、常に参詣絶えず」と特記しており、山岳霊場にあつて特別な印象があつたのかもしれない。

宿坊への宿泊

その晩、竹村は薬王院に止宿している。すでに、享保四年(二七一九)に富士参詣者宿泊の記録があり(連載30)、寛政七年(二七九五)には江戸の文人石永貞が宿泊している(連載46)。竹村の一連の描写も、当時の坊内

と参籠の様子が垣間見られて興味深い。

庫裏に至りて一宿を乞い、足すすぎて案内につれて座敷に入る。常に泊る人々が多しと見えて、万事慣れて風呂も程なく出来たり

まるで旅館で案内を受けるようだが、水に乏しい山上で風呂まで沸かしていたとは驚くほかない。

厨に行きて井を見るに、かかる高山の頂に掘りたれば、水底まで三十尋に及ぶと言う。下男二人向いて綱を引き上ぐ

水の供給源は台所の井戸だった。明治時代の絵図にもそれは確認できるが、三〇尋は五四メートルもの深さである。真偽の程はさだかでない。ただし、福德弁財天の洞窟に見られるように、山中の地下水は豊富だった。

「その夜寺僧来りて物語す」と、山中に棲む仏法僧という霊鳥が話題となり、竹村は来山が仏法

僧の鳴声が聞ける時期でなかったことを残念がっている。宿坊で住僧と参籠者が和やかに交歓する光景がほほえましい。

この夜、我寝むりかねて、更るまで目覚め居たれば、燈かがけて屋の紀歩行せしところ、日記に記し居たるに、明り障子の前なる樹間にて猿のあまた度、叫びたり

目が冴えて眠れぬため灯火の下で紀行をまとめていたところ、窓外から猿の鳴き声が聞こえてきたとのこと。森閑とした当時の境内の風情がよく伝わってくる。

註 石老山は神奈川県相模原市緑区にある標高七〇二メートルの山。山腹に真言宗顕教寺が所在する。山中に巨岩が点在する信仰の山。

《参考文献》『日野市史料集』続地誌編(一九九二)おことわり 本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。



山上の伽藍 『高尾山石老山記』
(国立公文書館デジタルアーカイブ)から

神変祭厳修

六月七日(土)



六月七日、神変堂において、神変祭が行われました。お祀りされている神変大菩薩は修験道の開祖であり、役行者の名前でも知られております。

神変様の御命日と伝わるこの日、神変様の教えである、庶民の救いとなる、「生活の中の仏教」の実現を願って、法要が行われました。

現在では健脚や腰痛平癒の御利益を求め、御参詣や登山の皆様が熱心にお祈りされております。

高尾山法類会定期総会

六月五日(木)

薬王院と法縁の深い寺院の集まりである高尾山法類会が行われました。初めに山上の有喜閣大広間にて、埼玉第十一教区明光寺御住職、法類会顧問の佐藤玲秀大僧正による「高尾山の僧堂教育と体解」と題された講演が行われました。

その後八王子市内に会場を移し、佐藤貫首より御垂示、犬山会長の御挨拶を頂き、近況報告、新入会員紹介等の議事が進行され円満に閉会となり、続いて懇親会が行われ、旧知の会員同士和やかな時間を過ごされました。



江戸消防記念会 第十区高尾山木遣高聲會 木遣塚祭

六月十五日(日) 於・飯縄権現堂下踊場



弘法大師降誕会

六月十五日(日)



一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

四十二段 手遅れなどにはしない 心配りと目配りで

物事に対して常に受け身にならないようにしましょう。問題が起きてから動くのではなく、起こる前に察し、先回りして行動することが重要だと考えます。誰かに、“気づかれる前に”配慮し、先に動く姿勢を持ちたいものです。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約三百万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々が参加されております。期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますと、健康登山者限定の記念品と交換できます。

帳面……………七百元
スタンプ……………百円

高尾山 季節散歩

和風月名

七夜月

「ななよづき」

七月の行事といえば、やはり七夕が有名です。そのため、七月は「七夕月」や「七夜月」といった別名でも呼ばれています。

短冊に願いごとを書いて笹に飾る風習は、今でも全国的に親しまれており、子どもから大人まで多くの人々に楽しまれています。

今月の風物詩

蟬の声

七月頃になると、木々の間から蟬の鳴き声が響きわたり、本格的な夏の訪れを告げます。

種類によって鳴き声や鳴き始める時期、時間帯が異なり、アブラゼミの賑やかな鳴き声は夏の屋下がり、ヒグラシの涼しげな声は、夕暮れ時の情緒を感じさせてくれます。

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙

「出会う草花」

八王子市 南保 仁恵



「天道虫」

八王子市 峰尾里枝子





高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行をお勤めしております。

御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩惱を焼き淨めるために行われます。そして、御信徒の皆様が祈りが御本尊様に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、御供物と共に清浄な場所に奉安札拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

御護摩修行のすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

御朱印のご案内

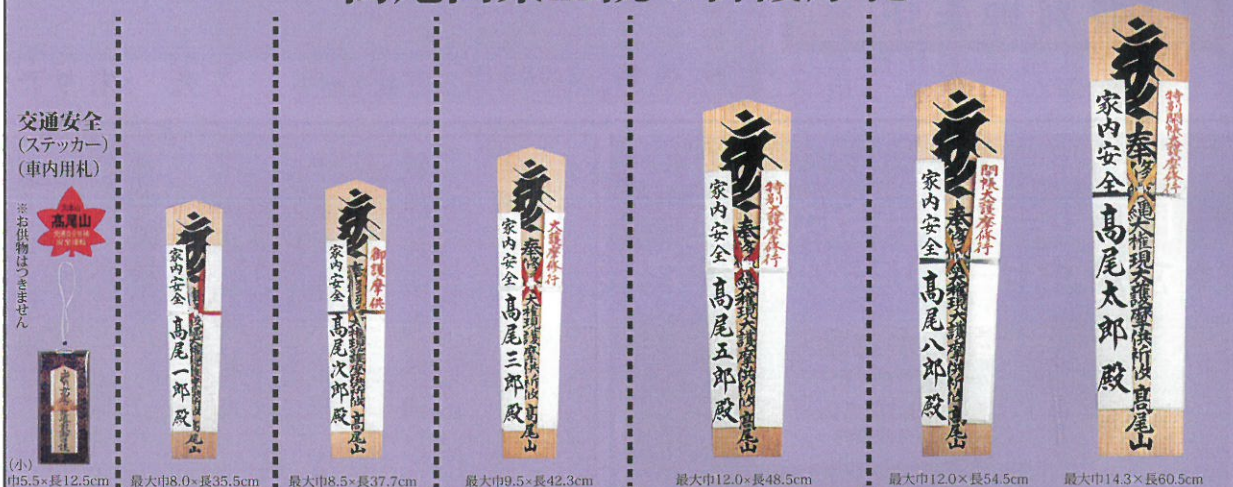
御朱印とは本来、心願成就を祈り書き写した経文（般若心経・観音経等）を、御本尊様の宝前にお納めし、その祈願を込めた印として頂いたものです。

現在には神社仏閣への参拝の証として、御朱印を頂く場合が多いようです。

高尾山は靈山として、又、多摩新四国第六十八番、関東三十六不動尊第八番の靈場の札所としてもその名を知られており、季節限定の御朱印など、様々用意しております。

尚、御朱印は御本尊様の御分身に当る宝印であります。大切に護持頂きまして、益々御本尊様のご利益に浴せられますよう心よりお祈り申し上げます。

高尾山薬王院の御護摩札



(大)	10,000円	お 護 摩	お 護 摩	お 護 摩	特 別 大 護 摩	開 帳 大 護 摩	特 別 開 帳 大 護 摩
(中)	5,000円	3,000円以上	5,000円以上	10,000円以上	30,000円以上	50,000円以上	100,000円以上
(小)	3,000円						

奉納杉苗(杉)	御 礼(礼)	心願成就(心)	入学成就(入)	安産成就(安)	良縁成就(縁)	開 運(開)	当病平愈(病)	身体健全(体)	厄 除(厄)	災難消除(災)	身上安全(身)	交通安全 車内用札 車交	交通安全 車内用札 車交	事業繁栄(事)	商業繁昌(商)	家内安全(家)
---------	--------	---------	---------	---------	---------	--------	---------	---------	--------	---------	---------	--------------------	--------------------	---------	---------	---------

お護摩の願事

お願い事は一体一願意と
します。

併願（二願意）は一万円より受け賜ります。

お護摩札には年令・生年月日等はいりません。

おはなし散歩道

心の味

八王子市 池田美絵

「駅前のパン屋さん、閉店するらしいよ」。

「えー、それほんと?」
同僚から聞いて、私は心底驚いた。会社の近くにあつて、この店でお昼に食べるパンをよく買っていた。開いているのがあたり前のように思っていたので、なんとも言えない寂しさがおそつてきた。私が就職した三十五年前にはすでにあつたから、少なくとも四十年はたつている。

そういえば一週間ほど

前、店の前を通った時におばさんが店先でお客さんと話し込んでいるのを見た。でも、お客さんと気さくに接する人だから、私は気にもとめずに通り過ぎた。もしかしたら、お店を閉めることを話していたのかもしれない。

この店は、商店街の一角にあつた。三間ほどのガラス戸の向こうに大きなショーケースをしつらえ、希望のパンを言うとおばさんがトンゲでつまんで手際よく袋に詰めてくれる。明るく快活なおばさんが接客をし、奥の調理場では寡黙だけれど、やさしそうなおじさんがたたくさんの種類のパンを焼く。夫婦で営むこの店は、パンの焼けるおいしそうなにおいが充満していた。

定番のサンドイッチや
カレーパン、デニッシュ類
はもちろんのこと、生ク
リームやあんドーナツな
どの甘いパンも絶品だつ
た。どれも素朴な味わい
で、おばさんの人柄もプ
ラスアルファの味付けに
なっていた。

たとえば私が、午後一

時を過ぎて買いに行く
と、「あら、今日は忙し
かったのね。おなかすい
たでしょー」と労^{いたわ}つてく
れる。おばさんの温かみ
を感じながらオフィスで
パンを頬張ると、おなか
も心も満たされて午後
の仕事に取り組めた。

開店と聞き、私はあらためて数力月前におぼさんがぼつりと言った言葉を思い出した。「商売を始めた二十代のころと今

も動く量は同じでしょう。正直きつく感じる時があるのよ」と。弱音とも思える言葉に私は少し戸惑った。私だって五十代になつて体力の変化を感じる。私より年上のおばさんの年齢を考えればなおさらだろう。もしかしたら、そのころには店を閉めることは決まっていたのかもしれない。

「月末で、閉店するらしいよ」。数日して同僚が教えてくれた。彼女もまたこの店のファンなのだ。「ね、最後に行こうよ!」。私は彼女と約束をした。

最終日、これまでの感謝を伝えたいと私はパン屋さんに向かった。なんと長い行列ができていてはないか。この店で行列を見たのは初めてだった。きつと並んだ一人一人に美味しいパンの思い出があるに違いない。

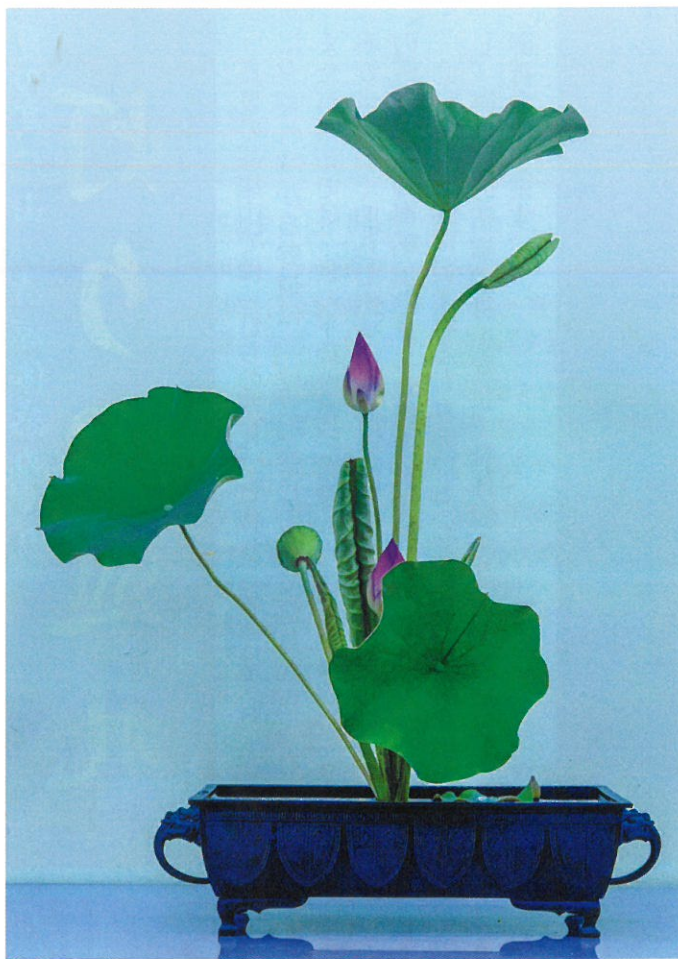
おばさんはいつものように明るい声で応対してくれたが、握手を求める
と涙を浮かべていた。この日はおじさんも店先に

出て、おばさんを手伝いながら一人一人に頭を下げていた。

しばらくたつたある日、会社からの帰り道に店の前を通つた。シャツターがきつちりと下ろされ、本当にもうこのパンは食べられないんだと実感した。(少し体を休めたら、ご夫婦で楽しい時間を過ごしてくださいね)。私は心の中で祈つた。

(挿し絵・小出茂)





花材：蓮

いけばなの心 ⑥4

華道教授 佐藤 宗明

夏の暑い時期になると、いけばなでは水辺に生える植物を使うことが多くなります。今回は、その中でも「蓮」を使った生花正風体をご紹介します。

水辺の植物には、蓮のほかにも力キツバタ、コウホネ、ガマ、フトイ、ヨシなどがあり、いずれもこの季節によく用いられます。中でも蓮は、七月から八月頃にかけて開花の時期を迎え、多くの人々に親しまれている花です。蓮の生花を生ける際には、さまざまな花や葉を組み合わせて、全体の形を整えていきます。蓮は、泥の中からまっすぐに茎を伸ばし、美しい花を咲かせることから、清浄の象徴ともされています。水中深くの泥から茎を伸ばし、水面上に花や葉を広げるため、生ける際にもその姿を思い描きながら、水底から伸びてくるような自然な形を意識しているのが大切です。

◎健康登山の皆様へ
高尾山報投稿の御案内
御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの、心温まるお話を聞かせて頂いています。

『高尾山健康登山の証』のお勧め
年間約三百万人の方々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースで楽しみください。

※ 投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございます。



帳面……七百円
スタンプ…百円

中興開山六百五十年記念

特別御朱印授与の御案内



特別御朱印

授与期間 年内予定
授与所 御護摩受付所
授与料 2,000円

本年は中興開山の祖である俊源大徳が高尾山を再興された永和年間より数えて、六百五十年という大きな節目に当たります。この勝縁を記念して御護摩受付所において「特別御朱印」を授与しております。

この御朱印は御本尊飯綱大権現様と、高尾山を中興された俊源大徳をモチーフとした、力強い切絵が施されております。御来山の折にぜひお求め下さい。

上洛雑感 (5)

夏遊鞍馬山

深山幽谷牛若丸

平家討伐深想観

教授兵法大天狗

奥州戦死弁慶嘆

厚木市 荒井 一雄

山の青

咲きも乱れず 清く立つ

牛若と云ふ少年のごと

(与謝野晶子)

夏、鞍馬山に遊ぶ

山奥、谷深くに牛若丸は修行す…

平家の征伐に思ひを馳せ

兵法の教授は大天狗様より…

奥州合戦の死に武蔵坊弁慶は

溜め息をつく…

当山賞首講演 六月十八日(水) 国際ロータリー2750地区 東京府中ロータリークラブ卓話



日本遺産 霊気満山高尾山～何故この山に人は集うのか～という題目で日本遺産と高尾山に伝わる修験道について卓話を行いました。



登山だより

■ 八月行事日程 ■

一日〜七日

聖天秘供(聖天堂)

四日、十六日、二十八日

弁天秘供

八日

仏舍利詣り(仏舍利塔)

二十三日

月例写経会

(十三時山麓不動院)

二十八日

奥之院開扉供養

(十時奥之院)

三十一日

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

毎日の お護摩奉修時間

午前9時30分
" 11時00分

午後0時30分
" 2時00分
" 3時30分

ご講中・団体等
御相談下さい。

☆神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝し、沢山の御供物を捧げて御本尊様威光倍増の為、御供養申し上げる法要です。皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。

尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。

毎月二十一日午前九時勤修御志納金 二〇三千元以上



※八月の御詠歌勉強会は都合により休止とさせて頂きます。

高尾山の昆虫

カラスアゲハ

189

代表的な蝶であるアゲハには黒系の種が目立ち、クロアゲハを筆頭に多種います。その中でカラスアゲハ(烏揚羽)は、翅の色が単なる黒色で留まらず金緑と青藍の鱗粉が散りばめられて一際綺麗です。

子供の頃、黒いアゲハを見つけてもカラスアゲハはいなく、都市部では少ない種だと感じていましたが、後年郊外では普通に見られる蝶だと知りました。

高尾山にはより大型のミヤマ

カラスアゲハも産し、翅の緑帯や青帯がより明瞭で美麗種とされますが、カラスアゲハの方がシンプルに美しいとする根強い支持者は多くいます。

春型と夏型があり、春型は小型で綺麗とされますが、大型の夏型も十分綺麗です。

前からカラスアゲハの和名の由来が気になっていましたので、調べてみると、これは本種の黒く光沢がある体色がカラスの羽を思わせ、さらに翅の表面がカラスの濡れ羽を連想させることからとされます。

鳥のカラスは嫌われ者のような立ち位置になっていますが、蝶のカラスアゲハは人々に親しまれ市民権を得ているのは何とも皮肉な感じがします。

(文松島 孝 撮影上村 雅昭)



高尾山報助成金

御志納のお願い

当山では、大護摩修行等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報をご送付しております。引き続きご愛読して頂きますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。



下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます



高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大 本 山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 犬山秀康
編集人 菅井倫浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円